

「さとし君の居場所と僕」

中濃サークル 上村文隆

1、はじめに

私たちは実践分析を大事にする。そこに登場する大人と子どもたちは今を精一杯生きている。だから実践が示してくれる事実は、私たちに様々なことを教える。

「人は生きているかぎり、今をどう生きるかという問題をさけることができない。今生きているということが、**問題をつくる**」

これは故鶴見俊輔氏の言葉だ。私たちの実践分析の方向を指し示している。鶴見氏はさらに、**unlearn** (まなびほぐし) という言葉を紹介している。

「教育 (自己教育) は、それぞれの文化のなかで「生き方」を伝える試みであり、それは「まねる」ことから始まる。また、教育は、**学んだことを解 (ほぐ) す**——「まなびほぐす」(ヘレン・ケラーの言葉) ことであり、解したものを自分の寸法に合わせて編みなおす営みである。それによって、**教育の目的である「自分らしさ」(integrity)** を構築することになる。その自分らしさとは、ひとつに纏められた「全体」(total) ではなく、そっくりそのままの「まるごと」(**whole**) を意味する」(『教育再定義への試み』より)

曾我実践のレポート分析は、問題⇒方針と、「まるごとの自分らしさ」を明らかにすることであり、曾我さんにとっては「まなびほぐし」であったと感じる。

2、題名「さとし君の居場所と僕」から読み取れること

この題名に「僕」が入っていることが気になる。つまり曾我さんはさとし君だけの問題とは考えていない。自分自身の問題でもあると考えている。何だか嬉しくなってくる。

次に「居場所」とは何か。これはレポートの最後の [8] の部分に、高校の演劇部の仲間や先生との出会いを紹介し、「**ありのままの自分を認めてくれる人と場所が、楽しくて仕方がなかった**」と書かれているその「人と場所」のことである。

ありのままの自分とは抑圧されていない自分である。具体的には、藤井先生が「個人的好みの抑圧は鬱や無気力を引き起こす」と示されたことから、さとし君やクラスの子たちが自分を出す→何でも言える→その中から自分を見つけ出していく→それができるクラスを目指す→何でも言いあえ、受け入れてくれるクラス→「**Enjoy**」(中学時代を精一杯生きる—自分を出し、ぶつかりながら仲間と共になしとげ、課題をのりこえていく) とつながっていくのだろう。

曾我さんはさとし君とのトラブルを通じた出会いから彼の苦しみに共感している。「彼と距離をおく」と「彼を理解しよう」とすることの間をゆれながら。

そのことでは、フロアーからはさとし君との「対話」をもっとするべきだという意見が出た。さとし君の起こす様々なトラブルは彼の (意識していない) 表現の一つなのであるから、それを自覚させるためにも対話は有効であると。そして、それは曾我さん自身の中

学時代を迫体験し、さとし君を通じて再体験し出会い直していく過程なのだ。

3、 「実践のサイクル」から見ると

曾我実践で問われていたことは、どういう指導方針を持つべきなのかということであった。はっきり言えば方針が定まっていない。さとし君の課題は何か、リーダーたちの課題は何か、クラスの課題は何か、・・・

だからレポート分析の討論の重点は、さとし君がどのような課題を持ち、同様にクラスがどのような課題を持っているのかということにかたよっていった。そのためにはさとし君のことをもっと知る必要がある。

これを図で示すと次のようになる。これは私たちが学級づくりで大事にしてきたものだ。

- (1) 現状分析をする—評価できるところ、問題は何か、課題は何か
- (2) 方針を立てる—（教師の）指導方針と（子どもたちの）活動方針
- (3) 原案・討議・決定—自分たちで話し合っ、自分たちで決める
- (4) 活動をする
- (5) 総括をする
- (6) (1)へもどる。（この過程がP D C Aと大きく異なるのは、自己変革を伴うことである）

この観点で曾我実践を振り返ってみよう。具体的に体育祭の取り組みを例にする。

(1) 現状分析

曾我さんは、さとし君を次のように分析している。「感情的になりやすく、自分の非を認めることに抵抗があるため、何でも相手のせいにしてしまう傾向がある」これは小学校時代から同じ。だから、彼の怒りっぽい性格から彼から距離を置く生徒も多くなっている。

一方、さとし君は学力が高く、社会や国語のグループ学習でもリードする発言をして班がMVPをとる活躍をしている。でも、授業中にさとし君がちょっかいをかけることがある（どうも女子に）。また、さとし君はプライドが高いのではないかという分析もあった。

さとし君のこだわる傾向や昔のことを忘れない傾向、逆上する傾向などを見ると、彼に発達障害の傾向もあるのではないかと思われる。しかし、最初の電話での対話（これは見事だと感じる）で彼がすすり泣く場面がある。ここから彼自身が苦しんでいると曾我さんは共感している。とすると、その苦しみをクラスの子たちが共感していくことが必要となる。そのために彼の切れる場面をみんなで探っていったらどうかという提案もあった。

あかい君は応援リーダーである。話し合いの時に気に入らずにさとし君が荒れた時、彼のそばによって個別に意見を聞くことができる。これはさとし君が自分の気持ちを伝えることが苦手なこともあるのかもしれない。

りささんへの授業中のいやがらせは、思春期に入った彼の無意識の行動かもしれない。

(2) 方針（ここでは学級の指導方針とさとし君の指導方針に分けた）

○体育祭の取り組みを通じて、学級目標「E n j o y」（自分の気持ちを出し、互いにぶつかりながら、仲間と共に取り組み、課題をのりこえていく）ことを追求していく。

○さとし君が自分の意見をクラスみんなに言うことで、自分の感情を相対的に見て表現することで、冷やかしやからかいを前向きな意見にするようにしたい。

(3) 原案（現状分析・提案理由・方針・決めるコト・取り組み方・・・）一緒だね

あかい君の提案は、何をするのかとか提案理由を口頭ではあるけどはっきりと述べている。さらにみんなの意見を聞いて修正案まで出している。なかなかである。

目的は時間行動をする「パチコの運動」。さらに、一人一人が声を出すことでクラスが前向きに取り組み、一所懸命な様子が伝わる応援にしたい。でも、このつながりはあいまいなまま。もう少し二人と追求したかった。特にさとし君に関わって。

(4) 討議・決定（ここにこそ自治がある）

これが結構面白い。この時、さとし君は「怖いです」と2度も言っている。確かにそういう面がある。武道じゃないんだからと、ゆうた君も付け足している。この二人の関係は面白い。いずれにしても彼が自分の意見を出したということは、その後の取り組みに大きな影響を与えている。あかい君の強引さ（優等生的だからこそ抑圧的に流れやすい）も気になるが、ちゃんと修正案を出して合意している点は評価できる。

(5) 活動（結果だけでなく、取り組みそのものから見えてくるもの・問題が大事）

さとし君のりささんへのからかいは、いろいろ考えられる。単に人を馬鹿にしているだけではないような気がする。いずれにしても、このクラスでの決定に関しては、彼はちゃんと守っている。結果、クラスとして学年優勝。個と班の競技ではよかったが全員競技では3位。だからクラス全体としてのまとまりは弱いと曾我さんは総括している。

(6) 総括（これは自分らしさの学び、そして次の生き方につながる）

この時、最初の方針に沿って総括したらどうなるのだろう。一つ目の学級での独自取り組みの意味と成果については、あかい君やりささんと相談して、提案した方が良いと思う。それは、次の取り組み（組織づくりや合唱祭）につながっていくからだ。そして、しょうやっ「Enjoy」の意味が深まっていく。

もう一つのさとし君についてだが、それは曾我さん自身がきちんと総括している。

「内気な子にとって苦痛な時間であったことも容易に想像できる。だが、今回はクラスで話し合っって決めた取り組みで会ったという点では良かった」

私はこの前半の曾我さんの感性に共感する。これはクラスの子たちに伝えるべきだと思う。そして、「みんな、どうしてあの提案をクラスで守って取り組めたと思う？」と投げかけても良いと思う。それはさとし君が内気な子の代弁をしたということだ。

最後に、さとし君の居場所づくりはすでに始まっている。あかい君やりささんはさとし君と（対等に）付き合っっていっっている。喧嘩をしながらどこかにつながっっているゆうた君もいる（彼の方が本当の意味で対等かもしれない）。授業中のちょっかいをどうしたらいいのかというさりなさんとの対話がきっかけで具体的な取り組みも始まっている。何よりもさとし君を理解しようとし、自分自身を変えようとしていっる曾我さんがいる。だからこそ曾我さんはこれらの子どもたちをつなげるコーディネーターとなれるのだ。



